読書における実践分析と言説分析

－読書論分析の社会的意義－

Analysis of the Practice and the Discourse in the Study of Reading:
The sociological significance of an analysis of the discourse on the reading

富山 英彦

TOMIYAMA Hidehiko

In this article, an analysis of the discourse on the reading is evaluated as the sociological research on the printing medium in order to clarify the communication and the structure of the social group. The study of reading is classified into the research of the practice and the discourse. The former aims to reconstitute the practice through historical traces, and the latter to clarify the thinking style to guide the practice. Both are expected to be accumulated in Japan, where the study of reading is under way. An analysis of the discourse aims to clarify the way of seeing on the reading. Its attempt is also to anatomize a mechanism of the modern way of thinking.

1. 読書への視角

読書を対象にした社会学的な研究は読書調査やベストセラー分析、文学社会学や社会史などの多様な方法を動員しつつ、一定の蓄積を形成してきた。これらの試みを、文字メディアによるコミュニケーションに分析の視点を据えたメディア論の成果として整理することは、「読書の社会学」の広がりや境界を明らかにする上で有効であろう。本稿はこの研究の広がりを射程に据えつつ、「読書論」を素材にした分析の意義を明らかにすることを目的としている。

読書とは、文字メディアの線形的表現に基づいて意味を生成する実践である。その個人的な営為はメディアの拡散に伴い、一定の集団の生成を導いている。活版印刷は木版印刷との間に連続性を保ちながらも、その複製技術の向上により、共有される意味の拡散に大きく貢献した。書物に視覚化された文字とテキストは、時間と空間の広い範囲で意味の伝達と拡散を可能にするだけでなく、一定の型の思考の形成を促し、それに基づく集団の創出を導いている。

マクルーハンが「グーテンベルグの銀河系」と呼んだのは、視覚と線形的思考に優位が与えられる、活字印刷の生み出すメディア環境であった〔McLuhan 1962〕。視覚表現を均質化し、その大量生産を可能にする印刷技術は、新たな思考様式をもつ「活字人間」を生み出し、口語文化を辺境へと追い立てる。オングの「声の文化と文字の文化」論に引き継がれる彼の分析は、その詩的表現の難解なモザイクにも関わらず、その後のメディア史研究に少なからぬ影響を与えた〔Ong 1982〕。

このマクルーハンの試みを、社会の形成に対するメディアの決定論として整理することは、その理解として十分ではない。彼がそのモザイク的表現において試みたのは、線形的な論理に重きを置くわれわれの思考に混乱を与えることで、支配的な思考様式が存在を露わにすることであった。イリイチとサンダースが文章表現の網の中に、そこに組み込まれることのない「沈黙の空間」を見出したように〔Illich 1988:訳 174〕、マクルーハンはテキストの線形表現の中にモザイクの存在を視覚化したのである。メディアの実践にエポケーを投げかける彼の視角は、「近代」の思考様式を対象化する試みとして、メディア論の展開を導いている。

このマクルーハンの業績を1つの契機としながら、読書を対象にした社会学的研究は、文字メディアによるコミュニケーションの実践に近代的性格を見出だすとともに、その実践を導く思考の様式に考察のベクトルを傾けてきた。その広がりをも本稿では、対象と方法との関連に注目し、実践分析と言説分析の2つの方向性において整理しておきたい。

読書の実践分析とは、文字メディアによるコミュニケーションの痕跡から、その実践の在り様を読み解く方法である。「直接の痕跡が稀少であると同時に間接的な手がかりの解釈が複雑をきわめることから、読書の歴史を書くことは容易ではない〔Chartier 1985:訳 87〕」とシャルチエが指摘するように、読書は時の経過において、その形を止めることではない。読書をめぐる実践の可能性に対して、多様な資料から得られる洞察を積み重ねることで、それを再現することが求められている。

実践分析が主として対象とするのは、読書の痕跡から得られる断片的な情報から、文字メディアに基づく意味生産を再現することである。例えば、残された出版目録や蔵書目録への着目は、流通し、保有された書物群を明らかにする試みである。また、出版社や著者に送られる読者からの手紙には、彼らの実践が他者との関係性において刻まれている。そして、読み終えた書物の書誌や読後の感想をつづる読書日記の類からは、その内省の記録化を通して、読者たちの個人的な営みを窺い知ることができる。

時の経過において消え去る実践の中で、わずかに残るこれらの痕跡を刻み続けるのは、一定の思考様式に支えられた意味生産の営みである。読書は消え去りながらも、あるモノを意味生産の痕跡として歴史の上に落とし続ける。実践分析はその残されたモノに、関心と分析の光を投げかけるのである。しかしこの断片的な情報から、実践の存立を支える思考のメカニズムを問うのは容易なことではない。

実践分析のこの困難さに対して、言説分析は有効な視角を提示する。読書を言説化した資料は一方において、実践の記録である。例えば、読者による実践と内省の2つの側面を記録化する読書日記は、言説資料の両義的な性格を示している。読書の実践の再現を導く情報の提供は、言説分析と実践分析の重なりを示すのである。他方で読書を言説化する読書論から、その記述を導く規範性を読み解くことができる。読書に一定の位置を与え、実践を反省し、かつ期待する視角が言説の記述を導いている。読書論からその記述を導く規範性を読み解くことは、読書の実践を支える思考様式の解明へと連なる分析の方向性を指し示す。実践分析が困難に直面する領域に、言説分析は解釈の可能性を提供するのである。その意味において、実践分析と言説分析は考察の両輪を駆りながら、読書を対象にした社会学的研究の展開を支えるのである。

本稿はこの問題関心に基づいて、言説資料の1つである読書論の分析の意義と、その方

向性を検討する。この言説資料は一定の視点から文字をめぐるメディア行動を評価し、その意義や方法を論じている。その記述は「ことば」として残された規範の痕跡であり、文字メディアによる意味生産に一定の秩序を与えた記憶である。その記憶の解読と分析の方法を考察することで、読書論分析の有効性を明らかにしたいと思う。

そこでまず、現代を含めた歴史社会と読書との連関を問う文化史研究に注目し、その領域での実践分析の展開を明らかにしたい。読書を歴史的にとらえ返す研究において、実践分析はいかなる考察を進めてきたのか。その過程を検討する中で言説分析に与えられた課題を明らかにし、その一端を担う読書論分析の有効性を考察したいと思う。

2. 文化史における実践分析の展開

「読書」とは重なり合う諸事実の上に一定の痕跡を残し続ける、織り成す実践の産物である。読書の文化史は、その多様な事実の歴史的なちらばりに着目し、研究の蓄積を積み上げてきた。歴史資料を探索し、それを読み解くことによって得られる「音読」や「黙読」、「民衆の読書」や「エリートの読書」といった様式のパターン化は、それを支える多様な実践とともに、それぞれの間の連続的かつ非連続的な特徴が指摘されてきたのである。

読書の文化史研究の蓄積において、その先導的な役割を果たしてきたのは、フランスのアナール学派による「書物の社会史」である。フェーブルとマルタンによる『書物の出現』以来、日常性や心性の解明に関心のベクトルを傾けるアナール学派は、「書物の社会史」を1つの領域として位置づけてきた〔Febvre 1958〕。ダーントンはその先駆けに、500冊ほどの私蔵書カタログに対するモルネのタイトル分析を位置づけている〔Darnton 1982 訳 217〕。以来「書物の社会史」は主としてフランス革命の前夜、アンシアンレジーム期を中心にして、印刷され、かつ流通した書物の数と所有された書物の数に視角の焦点を定めた量的分析を展開している⁽¹⁾。

この量的分析の展開に対してシャルチエは批判を加え、読書による意味生産に着目した実践分析の必要性を主張している⁽²⁾。彼は印刷された書物をリスト化する試みに対してはフランス国外で印刷された本が流通する可能性を指摘し、財産目録を利用した所有分析に対しては目録に含まれない書物の存在を指摘することで、それぞれの量的把握の有効性に疑問を投げかけている。さらには印刷され、かつ所有された書物の量を把握したところで、その書物がどのように利用され、どのような意味生産が実践されていたかを知ることではできないとして、アナール学派の量的分析の方向性それ自体を批判の対象として位置づけている〔Chartier 1985: 訳 87-91〕。

その上でシャルチエが分析の焦点に据えたのが「3つの極」に視点を定めた、読書による意味生産の実践である〔Chartier 1989: 訳 10〕。彼が研究の極として整理するのは、第1にテキストの内的構成と戦略の解読、第2に文字によるコミュニケーションを支えるメディアの歴史、そして第3に多様な象徴材を自らのものとする読者の意味生産の解読である。彼はこの3つの異なる系列に属する実践の重なりの上に、読書による意味生産が成立することを指摘している。彼の主張する読書研究には、そのそれぞれの実践と相互の関係性を視野に入れることが求められるのである。

シャルチエが「3つの極」として提示した方法論的位相は、テキストとモノとしての書物、そして読者との関係性において、読書の実践分析の広がりや深化の方向性を明らかに

している。しかし長谷川が指摘するように、シャルチエが目指す実践分析の方向性は必ずしも、アナール学派が蓄積してきた量的分析を排斥するものではない〔長谷川 1992:64-66〕。読書による意味生産の実践を明らかにする上で、印刷された書物や所有された書物を量的に把握することは、必要な情報の提供である。両者は、わずかな痕跡から意味生産の実践へ近づくための、必要な分析の両輪をなすものといえる。

そのフランス歴史学における読書研究の流れに対して、日本における読書の文化史研究は発展の途上にある。出版者や書籍商の実践が制度的に管理された近世の読書に対しては、古文書の読解が進むに伴い、長友千代治のような書誌学者が分析の蓄積を形成してきた〔長友 1987〕。書物仲間を枠とする出版リストや、書肆や貸本屋の帳簿は流通した書物に関する情報を提供し、旧家の土蔵に眠る蔵書目録や手紙類、文学作品の細かな記述からは読者の実践を伺い知ることができる。

しかし、近代以降の読書の実践に対しては、『近代読者の成立』を代表とする前田愛の先駆的な諸研究を指摘し得る一方で〔前田 1973〕、出版物の量的把握を含め、十分な進展を遂げたとはいいがたい⁽³⁾。その理由として考えられるのは、従来のメディア論的考察が、新聞やテレビなどのマスメディアを対象にしたメディア権力論を中心に進展してきたことが挙げられる。メディア権力論とは、情報の送り手による支配性と受け手による被支配性を明らかにしながら、その権力構造を解明する試みである。新聞や雑誌、テレビなどのマスメディアの普及に伴い、大衆社会論的な関心に支えられながら、この種の議論は一定の説得力を持ち得てきた。それは「他人指向型」を提示したリースマンの社会的性格論に関連し得る、メディア論の1つの展開であった〔Riesman 1950〕。こうした考察の方向性が、読者を情報の受容者としてのみ位置づけ、その能動的な意味生産の実践に目を向けてこなかったことは批判に値する。メディアの権力関係における文字メディアは、情報の送り手から受け手へと流通する意味を伝達する、支配の道具として位置づけられてきたのである。

読書の文化史研究が意味生産の実践に注目するのは、こうしたメディア権力論から受け手論へと、メディア研究の視角が移るに伴っている。これまで支配の道具として注目を集めてきた新聞に対しても、山本武利の『近代日本の新聞読者層』に代表されるように、その読者に視点があてられ、そこに成立する意味の重層的な把握が試みられるようになっている〔山本 1981〕。「少年倶楽部」からの「アクション」とその読者からの「リアクション」に着目した岩橋郁郎の『少年倶楽部と読者たち』も同様である〔岩橋 1988〕。新聞や雑誌を対象にしたマスメディア研究も、その読者による意味生産の解明に漸次の進展を見せている。

また、こうした読書の実践への着目は、キンモンスの『立身出世の社会史』のように、メディア論の枠を越えた分析の可能性として、その展開を見せ始めている。明治期の若者を対象にした雑誌をめぐる、編集者の動向やテキスト分析、読み手である少年たちの指向性から雑誌に表象される立身出世主義の解明を導く分析の方向性である〔Kinmonth 1981〕。明治期の社会構造を支える集団的な指向性が、文字メディアの分析から読み解かれている。

このように日本における読書の文化史研究には、メディア論とその周辺領域を含めた広い範囲での展開が求められている。読書の実践分析には、出版や所有の量的把握を含めて、実践の痕跡の収集と解説が必要なのである。一方で言説資料に対する分析も、読書を支え

る思考様式を解明する上で、その展開が求められている。本稿が分析の社会学的意義を主張する読書論も、こうした言説資料の1つである。それは固有の事象を分析の対象としながら、読書に対する社会学的な研究に一定の蓄積を与えるものなのである。

3. 読書論分析の地平

ここでは出版された読書論に注目し、それを考察の対象として位置づけてきたこれまでの研究の方向性を明らかにしながら、蓄積の地平を整理しておきたい。

これまでの読書論分析の展開において、その主流を形成してきたのは言説資料の収集と資料化の方向性であった。膨大な出版物の蓄積の中から読書について論じる言説を搜し出し、資料群を一定の視点に基づいて配置する営みは、資料の存在を量的かつ形式的に把握する試みとしての貢献を残している。その収集と資料化の蓄積を鳥瞰するならば、次のように整理することができる。

その第1に、出版された読書論のリストを作成する試みがある。例えば、田中菊雄の『現代読書法』に附録としてある「読書法に関する参考文献抄」は、「当時この種のものの初めての試みであった〔田中 1987:243〕」という。そこには50冊の文献が収録され、言説資料へのアクセスを導いている〔田中 1942:287-305〕。同様の試みは、「学校図書館」131号および132号の特集「『読書論』について」にある鈴木英二の「『読書論』参考文献抄」や、『人生読本 読書術』にある「“読書術”に関する主要参考文献」に見ることができる〔鈴木 1961〕〔文献情報センター 1979〕。これらのリスト化の試みの中でも読書論の網羅的な把握を目指しているのは、出口一雄である。彼は1968年から74年までの『総合ジャーナリズム研究』に、「読書論の系譜」として766の読書論を解題を付して整理している〔出口 1968-1974〕。また1994年には約2300からなる「読書に関する参考文献総覧」を提示し、「読書論の系譜」以来の動向を含めた2次資料を作成している〔出口 1994〕。

出版された読書論のリストを作成するこれらの試みに対して、それを歴史的に配置する資料の作成を第2に挙げることができる。例えば、彌吉光長は古代社会から昭和20年代までの読書論を通史的に整理している〔彌吉 1951〕。その大時代的な記述は読書の社会的な変容を枠としながらも、その歴史的な普遍性を強調する結果を生んでいる。また、滑川道夫や稲村・阿刀田の記述は、明治期以降の読書論の歴史的な整理の試みである〔滑川 1967〕〔稲村・阿刀田 1968〕。多様な読書論の出現を支える歴史性を強調する一方で、その言説を支える固有の歴史社会の特性が指摘されている。そして田中菊雄は明治期の読書論を通史的に取り上げながら、それぞれの言説の書誌的記述を行っている〔田中 1961〕。これらの試みの中でも、紀田順一郎は随筆的な形式を取りながら、読書論の歴史的な成立に考察の多くの素材を提供している〔紀田 1977・1978・1985a・1985b〕。主として明治期以降の読書論を整理する彼の分析は、「いまこそ読書論の必要な時期はないといえるが、すぐれた読書論は出現しない〔紀田 1977:26〕」という読書の実践に対する自省に導かれながら、歴史社会に出現する読書論の特質を分析している。

そして第3の形式として取り上げることができるのは、言説の内容を典型的に整理する試みである。阿刀田高はその短い論述の中で、読書論を3つに整理している〔阿刀田 1963〕。修養のための言説、娯楽のための言説、生活改善のための言説である。この3つに

は戦前期から1960年代にかけての読書規範の歴史的な変遷を見ることができる。しかし、そこから言説の変容を読むことは目的ではない。むしろ、言説の多様な意味内容を構造的に整理することが求められている。同様の分析は尾原淳夫の「比較読書論序説」にも見ることができる〔尾原 1987〕。彼は5人の論者を取り上げ、その読書論を整理するが、それぞれの言説には一定の特徴が付されている。古典主義、修養主義、生活主義、読書主体論、読書整理論である。これらはともに、「新しい読書論〔阿刀田 1963:6〕」や「よりよい（適切な）、より生きた（現状に対応できる）読書論の再構築〔尾原 1987:1〕」という、実践への戦略に導かれている。読書の新たな規範に対する関心に支えられて、これまでの読書論の類型化が試みられるのである。

ここに整理した収集と資料化の試みには、それを支える2つの視角を指摘することができる。1つは読書を歴史的に普遍的な行為として位置づけ、その行為を導く言説としてこれまでの読書論を整理する視角であり、もう1つは読書論の成立を歴史社会の特質に帰する視角である。

その第1が意味するのは、言説を読書に関する先哲の思索として読み解く方向性である。読書の実践に対する関心の中で、先哲の思索からあるべき読書を学ぶ指向性がこの位置づけを支えている。しかし、この視角が規範の構築を目指し、読書をめぐる諸制度を対象化し得ない点において、それは読書に対する社会学的研究の展開に難点を与える結果を生むこととなる。

そして第2は、読書論から文字コミュニケーションの歴史的な特性を読み解く方向性である。読書の歴史的変遷の可能性を前提にしながら、一定の歴史社会と連関する読書の在り様が、その言説から明らかにされてきた。この視角は、歴史社会に成立する読書の実践を支える思考様式を問う方法として有効性を持ち得る。しかしそれには、読書論の意味構造を詳細に読み解き、言説化された読書のメカニズムを明らかにすることが求められる。読書論を収集し、資料化する作業が一定の進展を見せていたのに対して、このテキスト分析が十分に進展してこなかったことは、読書の文化史における言説分析の発展途上の1つの要因といえよう。

だがこれまで、読書論の言説構造そのものを読み解く試みがなかったわけではない。わずかながら、読書の歴史や実践に関心を持つ人々が、一定の視点から読書論のテキスト分析を行ってきた。そこで次にこの解読の試みに注目し、これまでの実績の検討を試みたい。ここでは沓掛伊左吉、飛田文雄、筒井清忠の諸研究を取り上げ、それぞれが成し得たものと成し得なかったものを明らかにする。その検討のプロセスにおいて、読書論の言説分析が基礎とすべき方法を明らかにしたいと思う。

4. 解読の試み

（1）歴史的アプローチ - 沓掛伊左吉「明治時代における読書論の系譜」 -

沓掛伊左吉によれば、読書論とは書物を通じて人生に処する道を説いたものであるという。ゆえにその記述は、個人の考えや各時代の生活態度によって変化を生む。彼は一定の歴史社会に内在する規範的なパラダイムに注目し、そこに生み出される言説として明治期の読書論を読み解き、その特徴を明らかにしようと試みている〔沓掛 1972〕。

沓掛はそれぞれの読書論を読み解くにあたってまず、各年代の一般史を記述することか

ら始める。文明開化や資本主義の成立、そして日清・日露戦争に至る「近代化」の過程はいかなる社会的様相を形成するのか。その記述を通して彼は、一定の歴史社会に内在する規範的なパラダイムを明らかにしている。多様な事象を貫く規範性が、この一般史の記述から導かれる。そしてこの規範性の延長に、それぞれの読書論の刊行の動機が結びつけられる。一定の歴史社会はいかなる読書を求め、「読み」による意味生産を具体化していくのか。欧米の知識を修得する明治10年代や、近代産業の発達に伴って書物の洪水をもたらす20年代、そしてナショナリズム的傾向を強める30年代が、そこに地平を共有する様々な事象とともに読書の実践に秩序を与え、読書論という言説を生み出していく。彼は一定の歴史社会の産物として、言説の書誌構造や論理構造を解き明かすことを試みるのである。

沓掛が目指すのは、一定のコンテキストに織り込まれた言説を、その布地の広がりの上で理解する試みである。歴史社会と読書論が連なる平面の境界から、彼はそれぞれの言説の性格を読み解いていく。例えば、翻訳書という新しいメディアに対する『訳書読法』の指示や、明治の混乱期に求められた『読書次第』の倫理的読書観、国力に対する自信を高める中での民族意識を反映した『読書と静坐』の儒教的性格などである⁽⁴⁾。明治期の読書論を分析する沓掛の視角は、一定の歴史社会に生起する多様な事象に連続性を与える規範的なパラダイムを出発点に、それぞれの言説を支える社会構造を浮き彫りにするものといえる。

しかしこのアプローチが歴史還元主義やパラダイム還元主義に陥り、言説の多様な意味構造への視角を失う危険は否定できない。歴史社会に内在する規範的なパラダイムから読書論の書誌構造や論理構造を理解することは、そこに働く政治的な力学を視野に入れることではない。言説は必ずしも歴史社会に対して整合的に生み出されるものではなく、時にはそれと抵抗し、時にはそれを排除する。歴史社会が求める読書に対して、それに距離をおく言説や次元をズラす読書論に、沓掛の方法は答えを出すことができない。

ここで求められるのは、書誌構造や論理構造の内部から読書論を貫く固有の論理を読み解く洞察である。歴史社会に共有される規範性に一致することも、ズレることもあり得る言説の規範性を、それぞれの読書論から読み解くことが求められる。読書論の記述を支える多様な規範性に注目することで、読書を言説化する多様な思考様式の連続性と非連続性を明らかにすることができるのである。

（２）比較思想的アプローチ ― 飛田文雄「日本近代読書論史序説」 ―

飛田文雄は小泉信三、亀井勝一郎、小林秀雄、三木清、河合栄次郎という太平洋戦争をはさんで活躍した知識人の読書論的記述を取り上げ、その思想的文脈からテキストの解説を試みている〔飛田 1968-1972〕。

飛田は論者の思想的文脈に導かれた作品として、各読書論の性格を指摘することから分析を始める。例えば亀井の『読書についての7つの意見』にはその思索的人生論に評価が加えられる一方で、随筆的発想による構成の欠如に批判が向けられる。また小林の読書論が文学論を基礎とし、河合のそれが学問論に根づくことが指摘され、記述の枠組みが明らかにされる。その上で彼は、論者の思想的文脈に沿う形で各読書論の再構成を試みる。多くの読書論に共有される読書の目的や方法から、精読に対する小泉の指摘や、三木による哲学的読書と科学的読書の区別まで、各論者の思想的産物として読書論の言説構造が整理

されていく⁽⁶⁾。

河合の読書論に対する分析の「むすび」で、「かれの読書論を知るには、かれの人間性を十分にきわめなければならない。また、その時代の性格をも分析せねばならぬ」と指摘するように〔飛田 1968-1972:15(2)〕、飛田の方法は言説構造の思想的文脈への還元を基礎としながらも、その思想性を支える歴史社会への視角を準備していた。しかしそれにも関わらず、彼の読書論分析が主として、言説構造を各論者に固有の思想的文脈に位置づけていることは、この分析の可能性を狭めた結果を生み出している。

読書論とは、歴史社会に生起する読書をめぐる諸実践を、一定の視角の下で評価する記述である。集団に共有され得る思考様式をこの記述から読み解くことが可能であるにも関わらず、論者に固有の思想的文脈に沿って分析する指向性は、飛田の分析が知識人たちの産物を対象としていることに帰因する飛田によれば、読書論の説得力はそれを記す人物の体験からしみ出た意見や忠告に対する信頼感に基づくのであり、その人物を知らない者にとっては説得が生じ難いのが近代読書論の「共通の問題」であるという〔飛田 1968-1972:12(2)〕。知識人たちが残した言説に重きをおくこの評価は、歴史的事件に重きをおく政治史や、文学作品の分析を進める文学史と共有し得る指向性に支えられている。残存する歴史資料が一種の「エリート」的な側面を持つがゆえに、それを対象にした分析に正当性が与えられてきた。しかし歴史資料に対するこれらの視角に対して、社会史のような方法が民衆の生活や表現を問い直してきた事実、読書論分析も学ぶ必要がある。

ゆえにその言説分析には、素材として残された資料に対して内在的に、その言説構造を読み解くことが求められる。それは発話主体と言説との関係性から言説そのものへと視点を移動させることであり、分析の視角を比較思想から社会史、そして社会意識へと移動させることを意味している。多様な言説に内在する思考様式そのものを対象として分析する視角が、読書論を生み出す思考様式と集団に共有される思考様式との連続性を非連続性を明らかにするのである。

（３）実践と言説の連関 ―筒井清忠『日本型「教養」の運命』―

筒井は修養主義との相関からエリート文化としての教養主義の成立を考察し、戦後の大衆文化の勃興によるその終焉を論じている。明治末期に成立する教養主義は、大正後期のマルクス主義の普及に伴って後退するが、昭和10年代にその地位を復権し、戦後にかけて成熟に達するという〔筒井 1995:81-120〕。その地位の復権に役割を果たすものとして、河合栄治郎の読書論的記述が取り上げられている⁽⁷⁾。

筒井は3つの点から、河合の読書論的記述の広まりを指摘している。1つは当時の読書調査で上位に位置する書物群と、言説にある必読書目との一致である。言説の指示と実践との相関は、読書論がマニュアルとして機能していたことを証明する。2つめは当時、学生として生活していた人々の回顧の紹介である。安田武や中野孝次、中曽根康弘などの手記は、実践に果たした言説の機能を生活史として記述する。そして3つめは、同種のマニュアル的書物の広まりである。加田哲二を始めとする昭和10年代の「読書論の全盛期」の中で、「日本の学生文化における教養主義は昭和一〇年代に完成した〔筒井 1995:105〕」という⁽⁷⁾。

筒井の関心は「教養主義」という集団的な指向性の生成と終焉にある。彼は河合を始め

とする読書論にマニュアルとしての位置を与えることで、その指向性の普及と連関する言説を論じ、その連関が成立する空間に「教養主義」を表象する多様な実践が成立することを指摘している〔筒井 1995:100〕。

筒井が読書論に与えるこの「マニュアル」としての性格は、大きく2つの意味を持つ。1つは実践を導く言説であり、もう1つは実践を反映した言説である。ここに実践と言説の連関の、多様性の1つの契機を見ることができる。読書論に対する実践分析や言説分析を展開するには、この連関のメカニズムを明らかにしておく必要があるだろう。

まず読書論という言説には、その実践が2つの方向から反映する。1つは過去の実践の記憶であり、1つは未来の実践への期待である。過去の読書に対する評価と未来に対する設計の力学が、記述の方向性を導いている。その意味において読書論の記述は現状の無批判な把握でもなく、普遍的な規範の提示でもない。読書の実践に対する視角の表出なのである。

一方で読書の実践もまた、読書論の記述を能動的に反映する。多様な実践の可能性に対して、言説化された読書を受け入れることも、抵抗することもあり得る。そして言説の存在が全く影響を与えないこともある。読書の実践が成立する固有の空間において、読書論に対する反映の形式が決定し、実践の多様性とその重なりが形作られるのである。

読書の実践と言説との連関において、分析はそれぞれの能動性に導かれる多様性を考察に加える必要がある。言説は単に実践を反映するものではなく、実践もまた同様である。両者はそれぞれの作用の中で、その具体像を生み出していく。読書による意味生産を言説化する「ことば」のシステムを明らかにするには、実践との間に生じる力の作用を読み解くことが不可欠なのである。

5. 社会学的対象としての読書論

これまでの読書論の解読の試みは読書の文化史、そして読書を対象とした社会学的研究の展開に一定の貢献を果たしながらも、その方法に課題を残している。われわれが読書論の言説構造に注目し、それを読み解くにあたって留意すべき点を整理するならば、第1にその言説に内在する固有の規範を読み解き、第2に言説と実践の連関を考慮にいれる必要がある、ということである。

第1の点を敷衍するならば、素材とする残された言説には、歴史社会の一定の思考様式が表象されていることに注意を払う必要がある。その思考様式は歴史社会の規範的なパラダイムに回収し得るものではなく、また一定の個人の思想的文脈にのみ位置づけられるものでもない。読書論はそれ自体、読書に一定の秩序を与える言説として完結した存在なのである。われわれはその言説から、そこに表象される対象を読み解き、他の言説との比較を通して、歴史社会の重層的な理解へと考察を進める必要がある。

第2の点は、本稿が「読書の社会学」の2つの極として整理した実践分析と言説分析の方向性において明らかにすべき意味を持つ。実践分析は主として、読書に関する断片的な痕跡から意味生産を再現する方向に考察のベクトルを傾け、言説分析が目指すのは、読書の実践を支える思考様式の解明である。両者は「読書の社会学」の両輪を駆りながらも、分析において一定の重なりを示している。実践と言説はそれぞれにおいて互いを内在化し、作用し合う関係にあるからだ。実践と言説とは自律的に対象化し得るものではなく、それ

それぞれの力学の中で分析すべき方向性を明らかにすべきものなのである。ゆえに読書研究には、その関係性を解読することが不可欠となる。

その上で、読書を対象にした社会学的研究に求められるのは、文字メディアをめぐるコミュニケーションがいかなる広がりにおいて、多様な実践と思考様式に支えられているのかを明らかにすることである。この解読の方向性に一定の集団の存在と諸制度の成立を見るのが、読書研究の社会的意義である。文字メディアに支えられた「近代」の思考様式に支えられた集団の存立が、読書研究の成果から明らかにされなければならない。そしてそれはまた、メディア論を深化させる1つの方向性に他ならないのである。現段階において発展の途上にある日本の読書研究は、多様な資料の解読を通して、蓄積の厚みを作ることが求められている。

一方で読書論に対する関心は、文字メディアによるコミュニケーションの成立を、認識論的に問い返す試みである。人は読書をいかなる「もの」としてとらえ、文字メディアを媒介にしたコミュニケーションを実践しているのか。読書による意味生産そのものに「意味」を与える思考様式を、読書を言説化する資料から読み解く。それは読書を支える一定の集団と制度への視角を通して見た、文字メディアコミュニケーションの存立を問う試みである。またそれは同時に、文字メディアに支えられた「近代」の存立そのものを内在的に読み解く試みといえよう。そこに社会的対象としての読書論の、分析の意義と可能性が存在するのである。

注

- (1) ダーントンはフランスの「書物の社会史」における数量史研究に批判を加える上で、この研究の蓄積が私蔵書カタログ、書評、政府に提出した出版許可申請書の3種類の資料を中心に展開してきたことを指摘している [Darnton 1982 訳 226]。
- (2) 「書物の社会史」の数量史研究とそこに加えられる批判については、長谷川の整理にその展開と問題点を見ることができる [長谷川 1992]。シャルチエとともに数量史研究を批判するダーントンは、これまで最も影響のあった研究としてエスカルピの文学社会学を取り上げるが [Éscarpi 1958]、著者に対するその数量史研究から引き出せる結論は「まったく何もない [Darnton 1982 訳 224]」という。それはエスカルピの分析が広く薄いサンプリングに基づくこと、そして時代によって変化し得る「作家」概念に無配慮にアプローチしていることによる。その上でダーントンは種々の数量史研究を検討し、それが特定のグループに適用される場合は有効だが、フランスの書物文化全体に適用することは、全体に共通な傾向が存在しないことから不可能であると指摘している [Darnton 1982 訳 235-236]。著者に対するエスカルピの人口動態分析へのダーントンの批判は一定の説得力を持つが、エスカルピの成果は生産と分配と消費の3つの側面から「文学の社会学」を位置づけたことにある。その意味で、著者分析にのみ批判を加えるダーントンの評価には疑問がある。
- (3) 前田愛は『近代読者の成立』の「あとがき」に、その作品が「読者層の三つの位相－作者の対読者意識、出版機構の構造、読者の享受相－から立体的に浮び上がらせるプログラム [前田 1973:307]」の結果であることを論じている。ここに、シャルチエの提示する「3つの極」と前田の研究プログラムとの方法的な重なりを見ることができる。

戦後期に出版された書物を量的に把握する可能性としては、国立国会図書館の所蔵目録や『出版年鑑』への着目が考えられる。一方、戦前期の量的把握を導く資料の1つに、内務省が作成した納本統計がある。戦前期において出版物を「出版物」として定義するのは、内務省を中心に展開された「出版警察」による納本と検閲の営みであった。そこから生まれた資料は、日本における量的分析の1つの可能性を示している。その統計データの再現とそれに伴う諸問題については、「内務省納本統計の分析」に論じられてある〔富山 1996〕。

- (4)『訳書読法』（矢野文雄 明治16年 報知社）は翻訳書の読み方を説いた読書論。『読書次第』（西村茂樹 明治26年 日本弘道会蔵版 博文館）では道徳学としての学問が説かれている。また『読書と静坐』（吉本襄 明治34年 狂簡文荘）では王陽明に基づく「大人之学」を中心に、その読書法が論じられている。
- (5)亀井勝一郎 昭和29年 『読書に関する七つの意見』 中央公論社。小泉信三（昭和25年 『読書論』 岩波書店）は古典を中心に、精読かつ再読をすすめている。また三木清（『読書論』 『改造』 昭和16年5月号:78-88）は対話としての読書を哲学的読書とし、仕事としての読書を科学的読書と位置づけて、それぞれの在り方を論じている。
- (6)河合栄治郎 昭和 11-16年『学生叢書』12冊 日本評論社。その1冊に河合の「読書の意義」や三木清の「如何に読書すべきか」を収めた『学生と読書』（昭和13年）がある。
- (7)加田哲二 昭和14年 『如何にして学ぶべきか』 慶応出版社。昭和16年 『如何にして学ぶべきか 後編』 慶応出版社。

文 献

- 阿刀田高 1963 「現代読書論の類型について」 『図書館学会年報』 9・10:5-7.
- 文献情報センター 1979 「“読書術”に関する主要参考文献」 『人生読本 読書術』 河出書房新社 pp. 268-278.
- Chartier, Roger 1985 *Pratiques de la Lecture*. 水林章・泉利明・露崎俊和（訳）『書物から読書へ』 みすず書房 1992.
- Chartier, Roger 1989 “Le Monde Comme Representation” *Annales* 44(6): 1505-1520. 二宮宏之（訳）『表象としての世界』 『思想』 812:5-28 1992.
- Darnton, Robert 1982 *The Literary Underground of the Old Regime*. 関根素子・二宮宏之（訳）『革命前夜の地下出版』 岩波書店 1994.
- 出口一雄 1968-1974 「読書論の系譜」 『総合ジャーナリズム研究』 5(5)-11(2).
- 出口一雄 1994 「読書に関する参考文献総覧」 『読書論の系譜』 ゆまに書房 pp. 287-384.
- Escarpit, Robert 1958 *Sociologie de la Litterature*. 大塚幸男（訳）『文学の社会学』 白水社 1959.
- Febvre, Lucien & Martin, Henri-Jean 1958 *L'apparition du Livre*. 関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰男（訳）『書物の出現』 筑摩書房 1985.
- 長谷川輝夫 1992 「書物の社会史と読書行為」 『思想』 812:52-68.
- 飛田文雄 1968-1972 「日本近代読書論史序説」 『読書科学』 12(1)-15(2).
- Illich, Ivan & Sanders, Barry 1988 *ABC*. 丸山真人（訳）『A B C』 岩波書店 1991.

- 稲村徹元・阿刀田高 1968 「明治百年 読書論の系譜」 『出版ニュース』 778:6-12.
- 岩橋郁郎 1988 『少年倶楽部と読者たち』 ゾーオン社.
- 紀田順一郎 1977 「私の「読書論」遍歴」 『学校図書館』 324:21-26.
- 紀田順一郎 1978 「読書論の系譜」 『EDITOR』 51:6-16.
- 紀田順一郎 1985 a 「読書論の創生と死」 『世界』 474:126-136.
- 紀田順一郎 1985 b 「近代一〇〇年読書の変遷」 『中央公論』 100(5):334-355.
- Kinmonth, Earl H. 1981 *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought*. 広田照幸・加藤潤・吉田文・伊藤彰浩・高橋一郎(訳) 『立身出世の社会史』 玉川大学出版部 1995.
- 沓掛伊左吉 1957-1958 「明治時代における読書論の系譜」 『書痴往来』 2(4)-3(4).
- 前田愛 1973 『近代読者の成立』 有精堂.
- McLuhan, Marshall 1962 *The Gutenberg Galaxy*. 森常治(訳) 『グーテンベルグの銀河系』 みすず書房 1986.
- 長友千代治 1987 「近世の読書」(日本の書誌学大系 52) 青裳堂書店.
- 滑川道夫 1967 「読書論の変遷」 阪本一郎・滑川道夫・波多野完治・室伏武(編) 『現代読書指導事典』 pp. 23-25.
- 尾原淳夫 1987 「比較読書論序説」 『読書科学』 31(1):1-6 .
- Ong, Walter J. 1982 *Orality and Literacy*. 桜井直文・林正寛・糟谷啓介(訳) 『声の文化と文字の文化』 藤原書店 1991.
- Riesman, David 1950 *The Lonely Crowd*. 加藤秀俊(訳) 『孤独な群衆』 みすず書房 1964.
- 鈴木英二 1961 「『読書論』参考文献抄」 『学校図書館』 131-132.
- 田中菊雄 1942 『現代読書法』 柁谷書院.
- 田中菊雄 1961 「読書論の系譜」 『学校図書館』 131:12-16.
- 田中菊雄 1987 『現代読書法』 講談社.
- 富山英彦 1996 「内務省納本統計の分析」 『社会研究』 26:81-103.
- 筒井清忠 1995 『日本型「教養」の運命』 岩波書店.
- 彌吉光長 1951 「日本における読書法の発展」 『理想』 25(10):15-27.
- 山本武利 1981 『近代日本の新聞読者層』 法政大学出版局.